

などを講師に呼び、毎月1回程度、農事改良、特に酪農の話聞かせました。

農家の安定した収入確保のため、「堤防を上手に使用することだ。堤防に牧草の種子をまき、乳牛を飼うべき」と説き、夫人とともに、地域の特性を生かした酪農の普及に力を注ぎました。

こうした背景には、関宿町では水害に対する河川改修で、築堤のために水田が買い上げられ、1戸当たりの耕作面積が小さいということがあったのです。

タカ夫人が翁の遺志を引き継ぐ

昭和23（1948）年の春に貫

太郎翁はこの世を去りますが、翁の教えは徐々に浸透していき、農事研究会のメンバーが中心となって昭和24（1949）年に酪農組合が設立されました。

タカ夫人は、自宅敷地内に集乳所を建設したほか、酪農組合の顧問となるなど、側面から活動を支えてきました。

乳牛の飼養頭数も増え、これまでの集乳所が手狭となったことから、昭和29（1954）年、鈴木家の敷地内に新たな集乳所が建設され、記念碑が建てられました。この碑は「集乳の碑」と呼ばれ、今も鈴木貫太郎記念館の東側駐車場の一角に見ることができます。

また、隣接地には明治乳業の集乳所（現在はJ Aちば東葛が関宿集乳所として施設を使用）も誘致し、

境や五霞、幸手などからも生乳が運ばれ、にぎわいを見せるようになりました。

こうして、昭和



記念館駐車場にある「集乳の碑」



牛舎をのぞくと人懐っこく顔を向ける乳牛たち

40（1965）年ごろには飼養戸数も200戸を超えるまでになったのです。

学校給食や環境にやさしい農業にも

その後は、生乳の計画生産や牛肉輸入自由化、飼料の価格上昇などさまざまな要因から、飼養戸数は減ったものの、現在も市内には23戸の酪農家が生産を続けています。



牛ふんの一部は堆肥にも利用

学校給食に地元で搾られた牛乳も提供され、子どもたちの力になっているほか、一部の牛ふんは、「もみ殻牛ふん混合堆肥」に姿を変え、野田市が進める「環境にやさしい農業」に向けた減化学肥料の野菜づくりにも役立つなど、今も貫太郎翁の奨励した酪農は、関宿の地にしっかりと根付いているのです。

【参考資料】

「正直に肚を立てずに撓たぶまず励め」鈴木貫太郎翁の遺訓と関宿の酪農」山崎農業研究所・平成15年